

Communication, Education, and Management of an International Laboratory

プロプスキ アレクサンダー^{1,a)} 武富 貴史^{1,b)}

概要：ここ数十年で、海外の大学との学生交流や外国人教員の雇用は世界中で共通の出来事となっている。留学生や外国人教員とともに研究室を運営していく上では、様々な課題を乗り越える必要があるが、これは全てのメンバに対して貴重な経験を与える。本講演では、コミュニケーションの壁や異なる教育的背景による問題について、我々の研究室での事例を紹介する。さらには、倫理的な背景の違いによるちょっとした衝突についても紹介する。最後に、これらの課題がどのように研究室のメンバの学びや成長のための機会になっているのかについて紹介する。

インタラクティブメディア設計学研究室

講演者らは奈良先端科学技術大学院大学先端科学研究科情報科学領域において、加藤 博一教授、サンドア クリスチャン准教授らとともにインタラクティブメディア設計学研究室で研究活動を行っている。我々の研究室は、2018年4月現在、全学生に対する留学生の割合が50%を超えており、これは奈良先端科学技術大学院大学の中でも特異な状況となっている。また、留学生は、フィリピン、タイ、中国、ドイツ、オーストラリア、トルコ、インドネシアと世界各国から訪れている。さらに、年間約10名の3-6ヵ月程度の短期滞在の学生や研究者を海外の大学、研究機関から受け入れを行っている。その結果、我々の研究室のメンバは、それぞれが異なる倫理観や教育的背景を持っている状況となっている。さらには、言語に関して、日本語、英語、母国語を流暢に話す者もいれば、日本語はあまり得意ではなく英語と母国語のみを話す者などレベルも様々となっている。日本人学生に関して、英語での意思疎通が可能な学生から、英語での意思疎通が難しい学生まで在籍している状況となっている。

このような環境では、研究室メンバは様々な機会を得ることができる。例えば、メンバ間でのコミュニケーションにおいては英語の利用が必須である場合があり、コミュニケーションをしていく中でそれぞれの言語のスキルを向上させることができる。これに関しては、英語のみではなく、

留学生は日本語のスキルを向上させることができる。研究室を国際化する際に生じる最も大きな問題は、やはり言語の壁であり、英語が得意でない日本人学生の一部は、英語を話すことを恥ずかしがり自然と英語を話す機会が減少し語学力を向上させる機会を失ってしまう場合がある。このような学生は、あまり国際的な研究室には向いていないのかもしれないが、英語が得意でなくても積極的に留学生とコミュニケーションをとる学生は徐々に語学力が向上し修了時には留学生とも仲良く会話をするようになる。これは、留学生に関しても同様で、積極的に日本語を話そうとする学生は流暢な日本語を話すようになっていく。また、それぞれの国の文化や同じ問題に対しても異なる考え方を持つことがあることなどを研究室の生活において経験することができる。これは各メンバの視野を広げることに役立っている。

研究に対するアプローチも、日本人学生と欧米出身の学生との間で異なる場合がある。例えば、日本人学生は、社会的側面から問題を考え、欧米の学生は技術的な側面から問題を考える傾向がある。これは、学生に限らず、海外での研究経験のある教員も学生と異なる考えを持つことがある。このような考え方の違いが生じた場合に相手の考えを拒否することもできるが、それぞれの考えを丁寧に説明することによってお互いに成長することもできる。

本講演では、上記のような我々の研究室での具体的な例を紹介しながら、国際的な研究室を運営していく上でのコミュニケーションや教育に関する課題について紹介する。

¹ 奈良先端科学技術大学院大学

^{a)} plopski@is.naist.jp

^{b)} takafumi-t@is.naist.jp